

尾崎士郎記念館企画展

昭和39年2月19日逝去

「追悼 尾崎士郎」 特集

平成22年1月19日～平成22年7月25日



士郎の外出を男送る清子夫人

昭和29年に屋敷を構えた大田区山王の自宅前にて。

清子夫人は平成21年9月15日逝去享年98歳。深い愛情と包容力で士郎の人生及び創作活動を支えた。

■ 開催にあたって

尾崎士郎は還暦を過ぎてからも筆を休めることはなく、毎年数冊の新刊を発表するなど、文筆活動を精力的にこなしていました。50歳の時に長男の俵士さんが生まれ、昭和29年に56歳で東京都大田区に初めての自宅を構えるなど、私生活の面でも充実した日々を送っていました。

しかし、昭和36年、63歳の時に直腸がんを発病します。手術の結果一旦は回復しますが、2年後に再発、半年ほど床に伏した末に昭和39年2月19日、自宅で息を引き取りました。

今回の企画展では、多くの方々に惜しまれながら66年の人生を閉じた尾崎士郎の最期に焦点をあて、士郎の人生を振り返りたいと思います。



武者小路実篤色紙

士郎葬儀に送られた色紙。白樺派の小説家実篤とは、晩年になって親しく交際した。

■ 闘病生活

士郎は昭和36年7月に慈恵医大病院に入院し、直腸がんの手術を受けました。病院では同じ病気の入院患者の死を目の当たりにし、死を意識することになりました。退院後には、元気を取り戻し、『小説四十六年』『一文士の告白』など、自らの人生を回顧する作品を手がけるようになります。

2年後の昭和38年夏、再び不調を訴え、検査の結果、がんの再発で手術は困難との診断が下されました。清子夫人は自宅での療養を選び、医師の往診を頼み看護婦を雇って最期まで介護に当たりました。



入院中の士郎

63歳の夏、直腸がん手術のために慈恵医大病院に入院。入院中の病室でも新聞・雑誌の連載を続けた。

■ 士郎の最期

病床にあっても文学への情熱は衰えず、筆が握れなくなると、口述筆記によって亡くなる直前まで執筆を続けました。

昭和39年2月18日、東京は雪で早稲田高等学院の入学試験へ出かけていた長男の俵士さんの帰りを待っていたかのように容態が急変しました。夜、士郎は娘の一枝さんに唱歌を歌うよう求め、娘の「桜井駅の別れ」を聞きながら、故郷吉良での幼い日の情景にひたってか穏やかな表情を浮かべたといえます。

2月19日午前0時53分永眠。戒名は文士仲間ぶんこういんでんしさんごうゆうだい こじで天台宗の僧侶でもあった今東光による文光院殿士山豪雄大居士。



『瓢々録』舟橋聖一重塚琢稿「吉良庄行」

清子夫人が士郎の知人137名に原稿依頼して一周忌に合わせて刊行された追悼録である『瓢々録』に寄せた原稿。士郎の案内で吉良の忠臣蔵関係の史跡をめぐった際の思い出を記載。



弔辞

葬儀の際に読み上げられた親友の作家尾崎一雄による弔辞。「自由に考え 自在にふるまって 尚かつ人々の深い敬愛を勝ち得るとは まことに至難のことですがそれをあなたは見事にやりとげたのでした」と士郎を評している。



士郎の葬儀 東京青山葬儀所

葬儀は友人の産経新聞社長の水野成夫を葬儀委員長として昭和39年2月21日に挙行。近親者・友人による葬儀に続いて、池田勇人首相をはじめ各界から500人が参列して告別式が営まれた。



士郎絶筆の書籍
最後まで連載を続けていた3作品。

『一文士の告白』は週刊新潮に連載された戦後追放時代を中心とした回顧録。

『遠き覚悟』は産経新聞に連載され、長編小説を目した但未完となった。

『小説四十六年』は東京新聞連載で、小説家としての経歴を記した自伝。

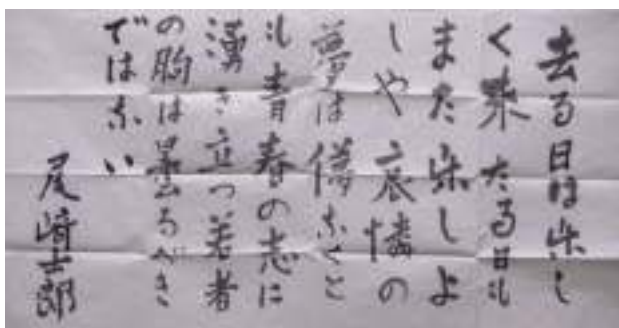
■ 士郎の墓

士郎の墓は、川崎市の春秋苑墓園にあります。士郎は高台で眺めのよい雰囲気が入って生前にここを墓所に決めました。墓石は高さ約50cmの黒御影石で、自筆の「尾崎士郎」の文字が刻まれた簡素なものです。墓の台石及び飛び石は、吉良から取り寄せられました。

春秋苑には、士郎の墓が建てられた後、小説家の坪田譲治、山岡荘ハラ友人もここが気に入り墓を建てています。



士郎の墓 川崎市春秋園



左:春秋苑文学碑 碑文習作 右:春秋苑文学碑写真

士郎の墓のある春秋園にファンの寄付により士郎の生前に建立された文学碑。習作文末の「曇るべきではない」が、碑文では「曇るべからず」に変更されている。吉良町立図書館正面に設置されている碑はこのレプリカ。

■ 吉良での士郎追悼

昭和39年4月26日、母校の吉良町立横須賀小学校の講堂で行われた士郎の追悼会には、吉良町仏教会所属の僧侶が多数参加して法要が営まれました。会には東京から清子夫人と長男の俵士さん、友人代表として作家の尾崎一雄、井上友一郎が参加し、両氏による士郎を偲ぶ講演が行われました。

追悼会に併せて、尾崎士郎先生顕彰会の設立総会が開催されました。顕彰会は判治登吉吉良町長が会長を務め、士郎の生前から計画が持ち上がっていた文学碑の建立を行うことが決定されました。



人生劇場碑

生前の士郎の希望により三河湾を望む吉良町宮崎の高台に建立された。

展示品リスト

No.	資料名	年代	種別	備考
1	慈恵区大病院入院写真	昭和36年	写真	『書簡箋演』より
2	今東光より病氣見舞い手紙	(昭和38年)12月27日	手紙	
3	日野耕之祐画見舞いの色紙「だんご坂から左に入った坂」	昭和38年12月	絵色紙	
4	士郎青山葬儀所葬儀写真	昭和39年2月21日	写真	
5	武者小路実篤色紙「花一枝 八十四歳実篤 為尾崎家」	昭和39年	色紙	
6	サンケイ新聞 夕刊 「尾崎士郎氏を悼む」 記事	昭和39年2月19日(水)夕刊	新聞記事	死去当日の夕刊
7	尾崎一雄 尾崎士郎葬儀手紙	昭和39年2月21日	手紙	
8	尾崎士郎葬儀 手電 9通	昭和39年2月21日	手電	大仏次郎、山岡庄八、岸信介、小淵恵三、桑原幹根、鶴田浩二、佐久間良子、早稲田大学雄弁会、賀茂鶴酒造会長
9	尾崎士郎墓写真	平成18年	写真	川崎市「春秋苑」
10	春秋苑文学碑碑文の習作「去る日は楽しく…」	昭和38年ごろ	士郎直筆書	本原稿は早稲田大学学生会館に展示
11	春秋苑文学碑と士郎写真	昭和38年	写真	ファンの手紙による
12	吉良町立図書館前文学碑	平成18年	写真	春秋苑文学碑のレプリカ。「去る日は楽しく…」
13	書籍『瓢々録』 福集・発行尾崎清子	昭和40年2月19日発行	書籍	一周忌に発行された士郎追悼文集。137名の原稿を掲載
14	瓢々録原稿 舟橋聖一「吉良庄行」	昭和39年	直筆原稿	400字詰専用原稿用紙3枚
15	瓢々録原稿 武者小路実篤「尾崎士郎君の本を見て」	昭和39年	直筆原稿	400字詰原稿用紙4枚
16	瓢々録原稿 中曾根康弘「瓢吉と俠士」	昭和39年	直筆原稿	200字詰原稿用紙5枚
17	士郎書ののれん「此の涙空しく替えて泄らす時なし」	昭和41年	のれん 士郎書入	士郎一周忌の記念品
18	新聞切抜き 東京新聞連載『純小説四十六年』 絶筆	昭和39年2月19日掲載	新聞切抜き	『純小説四十六年』スクラップ帳
19	新聞切抜き 絶筆小説『速き音』 広告	昭和39年4月25日掲載	新聞切抜き	『昭和39年40年士郎没後の切抜き』スクラップ帳
20	書籍『小説四十六年』 講談社	昭和39年5月28日発行	士郎著書	絶筆小説
21	書籍『速き音』 中央公論社	昭和39年4月19日発行	士郎著書	絶筆小説、装丁：中川一政
22	書籍『一文士の告白』 中央公論社	昭和39年4月19日発行	士郎著書	絶筆小説、装丁・挿絵：中川一政
23	賀茂鶴一合升「俠士君に捧ぐ 白虎隊 桜井歌の歌 聴きつ一代の夢を閉じにけるひと 克二」	昭和39年	賀茂鶴一合升 書刻文	「克二」は映画監督の菅沼克二？
24	士郎書湯呑「虚心つくるるときなし」「梅花一時に開く」	昭和40年	湯呑	士郎一周忌の記念品
25	人生劇場碑写真	昭和40年7月16日建立	写真	吉良町宮崎、生誕地の文学碑除幕式の記念品
26	生誕地碑写真	昭和40年2月19日建立	写真	士郎生家「辰巳屋」敷地内にあった地蔵堂境内に設置
27	民衆時報「故尾崎士郎氏の追悼会」 記事	昭和39年4月28日記事	新聞記事	昭和39年4月26年横須賀小学校講堂にて開催
28	尾崎士郎先生追悼会案内状	昭和39年4月	案内状	
29	尾崎士郎先生人生劇場碑並びに生誕地碑建設資金集要項	昭和39年9月	チラシ	
30	尾崎士郎・清子夫婦写真 大森源蔵ヶ原時代	昭和7年	写真	『書簡箋演』より 士郎34歳、清子21歳
31	週刊朝日「妻を語る 尾崎士郎」	昭和28年3月1日号	雑誌記事	清子44歳